閉幕。

―よさの地域デザイン会議―

年齢、性別、居住地区、肩書などが異なる多様な住民に参加いただき、持続可能なまちづくりにおける公共サービスのあり方について、住民の方々との対話により多彩なアイデアや提案を収集する「よさの地域デザイン会議」。3月20日、最終回として全体会を催しましたので、その内容をお知らせします。

昨年の8月22日に開催したキックオフミーティングを皮切りに、加悦・岩滝・野田川の地域ごとに3回の会議、全体会を1回開催し、公共施設の総数を削減しながら公共サービスの質の維持、あるいは向上するための意見や提案を多く出していただきました。各班のまとめは、広報よさの2月号（№192）をご覧ください。

全体会は、各班がまとめた内容の報告や各地域のコーディネーターからの講評、よさの地域デザイン会議メンバーからの個別提案のほか、関係者と山添町長によるパネルディスカッションを行いました。

●わたしの提案 ―3人の提案を紹介―

公共施設の基本的な建て替え方針としては、老朽化した施設は「機能を統合・集約し複合機能を有する施設」にするということだと思う。現在、大型木造建築が全国や世界で注目されている。私の提案は法隆寺の1,300年とまでいかなくとも、メンテナンスを行うことによって300年、500年使える施設を目指すことはできないか、目指すべきか、を議論してはどうかというもの。これには、日本の伝統的な建築工法と新しい建築方法の組み合わせによる最適化の検討、そしてメンテナンスや運営の仕組みの検討が必要である。施設のあり方からSDGｓ（持続可能な開発目標）の一歩先を考える懇談会・勉強会・研究会の開催から始めてはどうかと考える。

▶ 伊藤（いとう）　淳（じゅん）さん（よさの地域デザイン会議岩滝地域メンバー）

157億5,000万円お金が不足するグラフを見たので、公共施設が経済的に自立しているかどうかを見て、一つずつ精査する必要があると考えた。外貨を稼ぐ施設が一番だと思ったが、そうじゃない施設は不要というのは乱暴なやり方である。具体的には、経済的に自立しているかどうか、文化的豊かさ・安心安全がどうかをマトリックスで整理したとき、例えば廃校となった施設が農業加工施設になり収益を得ることができれば経済的自立に位置し、また、避難所として安心安全機能を付加すればまた違う位置づけができる。経済的に自立が困難で、文化的豊かさの低い施設をいかに違うマスに位置付けることができるかといった考え方で行っていけばよいと考える。

▶ 勢畑（せはた）　宏之（ひろゆき）さん（よさの地域デザイン会議加悦地域メンバー）

会議の中で出ていた意見を紹介します。

■ 役場庁舎は一つにし、総合図書館を野田川わーくぱるに併設。

■ 江陽中と加悦中を統合し加悦中とする。また、野田川の小学校を統合し江陽中跡へ。

■ のだがわこども園を野田川庁舎跡か山田小学校跡に設置。

■ 空きとなった小学校は、子育て支援センターや民間活用へ。教室は事務所や作業場へ、体育館は福利厚生施設にすることも可能。

■ グラウンドは、地域の運動会や避難所場所として使えるようにする。

与謝野町はスポーツの町。体と心の健康のため体育館は閉鎖すべきではなく、旧町ごとにある3つの大きな体育館の維持を希望する。

▶ 山崎（やまざき）　哲典（てつのり）さん（よさの地域デザイン会議野田川地域メンバー）

全体会で「わたしの提案」を発表した3人のメンバー

多様な方々で議論したデザイン会議（昨年の全体会の様子）

●コーディネーター講評　―3人のコーディネーターが振り返る―

▶ 加悦地域担当

滋野（しげの）　浩毅（ひろき）　氏
京都産業大学現代社会学部　教授

身近な地区公民館にさまざまな機能を加え、各種申請もオンライン化し、地域を結ぶ公共交通を充実することで、役場庁舎は一つに集約しても公共サービスは維持できるというのは、共通する内容であったし、多くの班で学校やこども園を集約するという意見があったことは意外であった。また、すべてを行政が抱えるのではなく、さまざまな主体が役割分担をして公共サービスを落とさずに施設の集約を目指すことはよいことと思う。

コーディネーターの方々（左から滋野先生、谷口先生、青山先生、杉岡先生）

▶ 岩滝地域担当

谷口（たにぐち）　知弘（ともひろ）　氏
福知山公立大学地域経営学部　教授

無作為抽出で選ばれた方が集り共に話し合う中で、その場から生まれる気づき、お互いに助け合うといった取り組みが良かった。そこには人間の成長があったと思う。岩滝地域で一番印象に残っているのは、阿蘇シーサイドパークを活用するアイデア。カフェや道の駅があり、農産物の加工や販売など、それを行政と民間が協力して作ればよいのではないかということを、移住してこられた子育て中のお母さんと年配の方が応援するというやり取り。

「シビックプライド」といって、住民がその町に誇りを持ち単に愛着や郷土愛ということだけでなく、自分自身が関わりこの町をより良くしていきたいという気持ちが、多世代や多様な人たちが話し合う中から生まれてきていた。どうしても公共施設の話になるとマイナス思考で不便になると思ってしまうが、知恵を出すことでプラスに持っていくことができる。

▶ 野田川地域担当

青山（あおやま）　公三（こうぞう）　氏
一般社団法人地域問題研究所　理事長

日本での住民参加は、まず役所が案を作りそれに対して住民から意見をもらうパターンが非常に多い中、白紙から議論した与謝野町の試みは大変画期的であった。今後、計画を策定していく中で、町職員や参加された住民の方だけでなく、その周りにいる方々も含めて、多様な方に参加していただけるのではないか。

「帰ってきたくなる町を創ろう」、この視点で考えるとおもしろい議論ができる。今回、帰ってきたくなるような町にするための「新しい機能」を提案されていたことはとてもすばらしい。こういうことが重要な要素の1つである。

10年、20年先、世の中はかなり変わっている。今ではオンライン手続きが当たり前になり、交通の自動運転はまだ時間がかかるが、シェアリングサービスの実証実験が始まっている。こういったことを町でやっていくと魅力的な町になる。

デザイン会議を終えて

無作為抽出した方からの手上げ方式によって、多くの住民の皆さんに参加いただいたことをうれしく思います。多様な方から意見がいただけたことは非常に大きな成果であり、民意を捉えるヒントがこの会議にありました。多くの方から意見をいただくことをこれからの行政運営で、重要視していかなくてはなりません。

次のステップとして重要なことは「決める」ことです。多様な意見を踏まえてどのタイミングで誰と共に決定するのかが重要になり、できる限り多くの皆さんの意見を反映するかたちでどのようにしていくのかが行政に求められてくるものと改めて感じました。

与謝野町長　山添（やまぞえ）　藤真（とうま）

当日の様子は町公式YouTubeチャンネルからご覧いただけます。なお、KYTでの放送は、5月を予定しています。

町公式YouTubeチャンネル